14. 対人恐怖，歩行困難など多彩な症状を呈した上腸間膜動脈症候群の1例

篠田直之，佐藤真理（千葉県こども）

入院中に恐怖症状，転換症状などを呈した，上腸間膜動脈症候群（SMAS）の1例について報告した。急性型SMASでみられる嘔吐，腹痛などの消化器症状は，心因性のものとして見逃されることがあるが，本例のように胃液の分泌，十二指腸の通過障害により嘔吐を呈する症例が散見される。早期に身体的治療に導入すると同時に，支持的な枠組みの中で，児の退行した状態を受容し，心理的な育て直しを図ることが必要だった。

15. 全生活史健忘を呈した1症例

日野俊明，竹内龍雄（帝京大・市原）

全生活史健忘は，突然自己の生活史全般に限って追想が不可能になるという，比較的希な病態とされている。今回われわれは，遁走を伴った全生活史健忘の一例を経験したので，その臨床経過や，心理的な背景，治療などについて，若干の考察を加えて報告した。

16. 長期入院後，単身アパート生活・再入院を経て，老人ホームに入所した分裂病者をめぐって

渡辺啓治，鄭　美江，小林靖典
（銚子市立総合）

60才の長期入院女性分裂病生活保護者が，単身アパート生活を試みたが再入院となり，結局念願の老人ホームに入所するに至った幸運な経緯を報告した。入院外医療を可能にしたのは，患者自身の生育歴・病歴に関係するだけでなく，医療・福祉・市民の連携または援助が好ましく働き，市立の病院であるが故の諸事情が利点として作用したことを指摘した。当科リハビリテーションには，この偶然を必然にするシステム作りが課題である。

17. 帯状回病変により幻覚・記憶障害を呈した海綿状血管腫の1例

池田智昭（千大）

帯状回での出血により，記憶障害，幻覚，発動性低下などを呈した海綿状血管腫の症例を経験した。検索した限りでは報告はないため画像および記銘力検査の結果（有関係語による成績が無関係語による成績より良好で，学習効果はあまり認められない）をふまえ，臨床病状に対する帯状回の役割について考察し報告した。

18. 多彩な精神症状を呈したBartter症候群の1例

青木　勉，大津正典（旭中央）
宮内義浩　　（同・内科）
斉藤万比古　　（国府台病院）

摂食障害を伴い，テタニーや痙攣，境界型人格障害様の症状や知能の低下を呈し，腎に非可逆的な器質性病変が認められた，Bartter症候群の症状精神病と考えられる1例を報告した。摂食障害に電解質異常が合併する頻度は決して少なくないと言われているが，摂食障害を合併した境界型人格障害の診断にあたっては，代謝性因子が精神症状に影響している可能性を考え，身体疾患の検索を含め慎重な対応が必要である。

19. 一般病室に入院した精神分裂病患者の治療の経験

熊切　力，島上　実（深谷赤十字）

当院は埼玉県北部の基幹病院である。1987年に精神科が開設されて以来，外来を中心に診療を行っている。精神科の病床を持たないため，必要に応じて一般病室を借り，精神科医が主治医となり精神分裂病患者を入院させる場合もある。この経験から，一般病室での精神分裂病患者の治療の問題点，限界性，可能性について考察し報告する。

20. 当院におけるコンサルテーション・リエゾン精神医療について

佐竹直子，佐藤茂樹，橘川清人
佐々木一　　（成田赤十字）

当院における昨年一年間のコンサルテーション・リエゾンの実態について調査することにより，有床の総合病院精神科の必要性や，精神医療全体におけるコンサルテーション・リエゾンの位置づけについて考えてみる。

21. （館山病院）精神科の統計的推移

市来真彦，植木良裕（館山病院）

当科は人口過疎地区の一般病院精神科である。入院患者は高齢化しており，精神分裂病の長期入院と鬱病の新規入院が多く痴呆は少ない。短期入院も増えてはいるが今尚社会的長期入院が多い。外来患者は増加しており，精神分裂病と壮年期・老年期の鬱病が多い。デイケアメンバーは精神分裂病が多く，入院歴のある者が増えている。デイケアは広義の意味で再発防止に重要である。